



深まる秋をクラシックと♪



『覆面作家は二人いる』北村 薫

(スタッフ・T)

音楽を読む

覆面作家でお嬢様な名探偵、新妻千秋とその担当編集、岡部亮介のコンビが織りなすミステリー「覆面作家は二人いる」に登場するクラシック2曲をご紹介します。一編目の2人の初会話ではラヴェルの『ピアノ協奏曲ト長調』が登場します。岡部や多くの読者にとっても不可思議な出来事が解決する鮮やかさは圧巻。新妻のクラシックに対する造詣の深さが分かる場面でもあります。3編目の表題作「覆面作家は二人いる」に登場するのはフォーレの『夢のあとに』。豪邸住みのお嬢様が岡部宅で岡部と岡部の兄とで宴会をする場面でもっと盛り上げようとして歌うのがこちらなのですが……平屋でビールを手にクラシック。それもしっとりとした愛の歌！というミスマッチさ。曲を聞きつつ読めばより楽しめることでしょう。このシリーズは第二作以降にも所々にクラシックが登場しますので、探しながら読むのも一つではないでしょうか。



ナクソスに
ログインして
アクセス！



ナクソスではラヴェルの『ピアノ協奏曲ト長調』、フォーレの『夢のあとに』ともに様々なバージョンでの演奏が収録されています。より物語やお嬢様に合う演奏を見つけてみてはいかがでしょうか。



『覆面作家は二人いる』北村 薫

出版社:KADOKAWA
請求記号:B913.6/4
駅南図書館所蔵あり

クラシックにふれよう

『鳥のカタログ』オリヴィエ・メシアン

(スタッフ・M)



「言語の起源は鳥の求愛歌である。」動物心理学者の岡ノ谷一夫さんはジュウシマツのさえずりを解析する中でその「文法」を発見します。そして「意味」と「かたち(文法)」の共振が織りなす「言語の進化」を追跡してゆきます。岡ノ谷さんの著書を読むうちに20世紀の作曲家オリヴィエ・メシアンのことが思い浮かびました。鳥類学者でもあるメシアンは五線譜を手に森に入り、鳥たちのさえずりをパートごとに採譜しました。そして『鳥のカタログ』などの楽曲を書き上げます。成熟した「理念(意味)」を語る近代西洋音楽をリセットしようとした時、彼がプリミティブな鳥の歌に耳を傾け、そして作り上げた曲が「前衛」と呼ばれるのは、面白いことではないでしょうか。現代音楽は“分からない”。でも“分かる”とか“分からない”ではなく、理念から解放された音、リズム、かたちにただただ耳を傾けてみる。そんな音楽体験もまたステキだと思います。

※オリヴィエ・メシアン『鳥のカタログ』は、ピアノ独奏曲で、第1巻から第7巻まであり、各巻にまた1つから3つの楽曲が第1巻第1番みたいに組み込まれています。例えば第1巻は第1番 キバシガラス、第2番 キガシラコウライウグイス、第3番 イソヒヨドリ、みたいな構成で、全体が本当に音による「鳥のカタログ」みたいになっています。全部で2時間30分くらい！

参考文献:『小鳥の歌からヒトの言葉へ』岡ノ谷 一夫/著 岩波書店 2003.6 中央/488.9/1
『言葉の誕生を科学する』岡ノ谷 一夫・小川 洋子/著 河出書房新社 2011.4 中央/801/4 他



ナクソスに
ログインして
アクセス！



「鳥のカタログ メシアン」で検索するとナクソスミュージックライブラリーには、48件ありますが、抜粋が多く、全曲載っているのが10件くらいしかありません。例えば イヴオンヌ・ロリオ、日本人のピアニストで児玉桃など。ぜひ体験してみてください。



編集担当のひとこと

ようやく長く続いていた暑い夏が終わり、今年は秋らしい季節を感じられていますね。つかの間の過ごしやすい日々をクラシックとともに過ごしませんか。秋の夜長にブラームスはいかがでしょう？ナクソスにも「ブラームス名曲プレイリスト」がございます。ブラームスには秋が似合いますね。是非美しい旋律と秋のひと時をお過ごしください。

